

芥川龍之介における中国人女性観の変貌——「南京の基督」と「湖南の扇」を重点に——

The Transformation of Ryunosuke Akutagawa's Views on Chinese Women: With an Emphasis on "The Christ of Nanjing" and "The Fan of Hunan"

王 書璋*

WANG Shuwei

要旨 近年、芥川の大正十年の中国旅行についての研究が盛んに行われてきたが、しかし、旅行前と旅行後を比較し、その変化についての研究がまだ少ない状況にある。本論文では、旅行前と旅行後の変化を探る一つの試みとして「南京の基督」と「湖南の扇」を例にとり、それぞれのヒロインの金花と玉蘭を比較し、その人物造型から芥川の旅行前と旅行後の中国人女性像の差を見出してみる。

キーワード 芥川 中国人女性像 中国旅行 金花 玉蘭

一

大正九年の「南京の基督」と大正十五年の「湖南の扇」の間に、芥川の中国旅行（大正十年）がある。この旅行が芥川の中国認識に、かけがえない意味を持つことは言うまでもない。大正十年の中国旅行まで、すでに数々の中国に関係する作品を世に送り出した芥川は、この旅行を通じて、現実の中国を体験することが出来、想像する中国と現実の中国の差もきつと見出したのであろう。この点について、単援朝は「自分自身と現実の『支那』というものを介在させ、両者の接点とした」、「文学によって構築された『支那』の夢が、単

に現実との接点に留まらず、現実認識ないしは価値判断の基準として機能する」と述べ、この旅行の重要性を指摘したのである。しかし、旅行前とその後の、芥川文学の中で、「文学によって構築された『支那』と現実の『支那』の差は、どのように現れているのであろうか。その差を探る一つの試みとして、「南京の基督」と「湖南の扇」を例にとり、両者を結び付けて考えれば何かが分かるのではないか。端的に言うところ「南京の基督」は芥川の中国旅行前の作品であるゆえ、まさに「文学によって構築された『支那』」である。一方では、「湖南の扇」は中国旅行後に書かれた作品であるため、現実の中国の反映であると言える。この二つの作品の比較を通じて、芥川における想像の中国と、現実の中国の差が見出されるので

*北京科技大学外国语学院教授

はないか。本文では、その差の一つとして、芥川の中国旅行前を持っていた中国人女性像と、旅行後に獲得した中国人女性像との差を見出すことを目的とする。

中国旅行前、中国人女性像をヒロインとする作品には「南京の基督」がある。旅行前の中国女性像についての考察は、この作品を分析するほうが適当である。これまでの「南京の基督」についての先行研究は、主人公金花の「基督性」がクローズアップされ、「中国人」という要素があまり注目されていない状況にある。しかし、芥川の旅行前の中国人女性に対する認識の反映である点において、金花は重要な意味を持つ人物である。また逆に、旅行後の中国人女性についても、『支那遊記』に中国人女性についての描写の幾つかが見られるが、小説として挙げられるのは「湖南の扇」しかない。「南京の基督」の金花と「湖南の扇」のヒロインの玉蘭との比較を通じて、芥川における旅行前とその後の中国人女性像の捉え方を見ていきたい。

次に先行研究における金花と玉蘭の位置づけを見ていく。まず、今までの「南京の基督」に関する先行研究のいくつかを取り上げて紹介しておきたい。

「南京の基督」が発表された直後の七月十一日の「東京日日新聞」に、南部修太郎の「『南京の基督』最近の創作を読む(一六)」が、この作品を「小綺麗に小器用に纏め上げた *novella* を書いて、気持ち好ささうに遊んでゐて」と述べる一方、「心の動きがない」作品に属するものであると批判する。そして、七月十三日の「読売新聞」に掲載された安倍能成の「七月雑誌を見て、芥川君の『南京の基督』」では、「巧みに造られたお話」と評され、七月十四日の「時事新報」

において、久米正雄の「『南京の基督』」で、「格を外さぬ文体の美しさ」、「全篇を作す態度の一糸乱れない立派さ、所々を機知で救ふ氣稟の閃き」などと高く評価する一方、「趣味ばかりで固めたメルヘンの領域」の作で、「作者の「心の動き」がどうも真の意味での材料への食ひ入り方が、為に疎外されてゐるやうに感ぜられてならない」という批評も加えられる。また、宮本顕治は「敗北の文学」⁽²⁾で、「氏のロマンチズムに溢れてゐる」「儂い夢に氏は憐憫と愛撫をそそいでゐる」と、評価している。このように、同時代評では「南京の基督」を肯定的に評価するものがある一方、批判も決して少なくはない。

しかし、それ以後の評価が前と異なつた。宮坂寛が「果たしてロマンチズムだけで裁断できるだろうか」という異議を提起し、「日本旅行者を登場させることによつて、(メルヘン)が中空から地上に引き摺り下ろされている」と指摘する。また、芥川の南部修太郎宛ての二通の書簡が注目され、それをめぐる論も多い。技巧の面では、三島由紀夫が「『手巾』『南京の基督』ほか」に、「短編小説といふジャンルを、大正九年にここまでもつてゆくことは他の誰にもできなかった。近代日本の急激な跛行的発展の一つの頂点の文学的あらはれ」と絶賛し、三好行雄も「手馴れた技巧が、しかしうわすべりのない重さで、がっちりした小宇宙を造型するのである」という評価を与える。

また、二十世紀七十、八十年代の先行研究は、金花の楊梅瘡の完治か潜伏かをめぐって、意見が分かれていた。三好行雄は、「日本人が残酷な事実の暴露をためらつてゐると同じように、作者自身も、夢を見る金花から現実の(事実)を奪いとることにためらつた」、「曖昧さから、——やや不鮮明な構図の内側にやがて、もうひとつ

の「南京の基督」を胚胎することになる」、「芥川龍之介自身が小説の終わった地点で、もうひとつの小説を書いてみせた」と評し、金花の病気の治癒が〈事実〉であるとして読む。宮坂覚は、「着想と、創作過程の中で結実されていったOdious truth 暴露のテーマが「南京の基督」で完全に合体されえなかつたのではなからうか」（前出）として、「着想とテーマ」の分離を指摘する。

そして、「南京の基督」における芥川のキリスト教思想に注目する論もある。笹淵友一は「芥川龍之介のキリスト教思想」において、「明らかにキリスト教の信仰や信徒を欺ける意図を持った作品」で、「キリスト教の冒瀆を意図した」と批判する。宮坂覚は、芥川にはキリスト教を「軽んずる為」「嘲る為」という目的意識のもとに書かれた作品はなかつた」（前出）として、「青年時代の実存的求道」、「聖なる愚人」室賀文武との関わりが金花に翳りを落としている「ことを見逃してはいけな」と述べ、「東洋的エトス」の視点を導入して肯定的に論ずる。

二

右に紹介した先行研究の概括によって、「南京の基督」が様々な視点から読まれたことが分かるが、先述した通り、中国人女性という点に注目する論がまだ見られないことは事実である。大正九年の時点で、まだ中国を訪れたことのない芥川は、中国人女性にどのような認識を持って、宋金花を創り上げたのであろうか。一つの推測として、彼は読書から得た知識に基づいて、金花を創り上げたことが考えられる。

芥川は、半自伝的な作品「大道寺信輔の半生」において、「實際彼は人生を知る為に街頭の行人を眺めなかつた。寧ろ行人を眺める為に本の中の人生を知らうとした。」と書き、人生についての知識を本から得たと告白する。もちろん、創作においても、同じことが言えるだろう。周知のように、芥川はいわゆる「支那趣味」を持っている作家であるため、中国の書籍を数多く読んだことが容易に想像できるのであろう。日本近代文学館所蔵の芥川蔵書目録には、和漢書が四六五点、一八二冊あるとされている。読書家の芥川はこれらの和漢書をあさって、中国女性のイメージを得たのであろう。では、近代以前の中国文学に出てくる女性たちは、一体どのような認識されていたのであろうか。芥川の蔵書を一冊ずつ考察することが出来ないが、石川忠久編の『中国文学の女性像』の「序」に、古代から近代までの中国女性像について次のように述べられている。

漢代に至って、儒教倫理が確立すると、ここに、節義を最高の規範とする女性観が前面に押し出されてくる。（中略）六朝に至って、志怪の世界で、背徳の女性を描くものも表れた。また、唐代の伝奇や変文の世界では、社会情勢の複製多様化に伴う各層各種の女性が描き分けられるようになるが、儒教倫理に殉ずる女性の顕彰や、仏教倫理による勸戒性も色濃くうかがわれる。（中略）宋の戯文、明の擬話本、清の『紅樓夢』等に於いては、白話という表現形式の力を得て、女性像を深化し、情の世界が緻密に描かれるのであった。（中略）近・現代文学に於ける女性像・女性観は、西欧文化の流入のもと、婦人解放の動きと関わっている。自立を求める女性のあり方や、性差別

の問題が主要なテーマとなり、女性からの女性観の表明も起ってくる。

引用文から中国人女性についての描写は「儒教倫理に殉ずる女性の顕彰や、仏教倫理による勸戒性も色濃く」、「情の世界が緻密に描かれるのであった」ということが分かる。芥川が好む中国古典文学は、時代を別として、『西遊記』や『聊齋志異』のような志怪文学、『太平廣記』や『剪燈新話』のような伝記文学、そして『繪圖牡丹奇縁』、『繪圖第二奇書』（民国一年石印）、『模範夫妻』のような小説類であることが、彼の蔵書目録から読み取れる。右の引用文を読むと、六朝の志怪文学には、背徳の女性も描き出されているが、主流ではないようであることが分かる。また、引用文に書かれている中国人女性についての描き方の変遷を読むと、やはり各時代の女性に儒教倫理に支配されていることが強く感じられる。儒教倫理が確立されたのは漢代であるが、それ以後、儒教が中国人精神構造の基本となり、女性の生き方も決して儒教倫理から外れることがない。背徳女性、情に溺れる女性を描くことも、その背徳の度合いが儒教を基準としなければならなかった。

「南京の基督」を読むと、金花は基督教徒でありながら、彼女の言動から、儒教倫理の影響がやはり感じられる。次に金花についての描写を挙げる。

少女は名を宋金花と云つて、貧しい家計を助けるために、夜々その部屋に客を迎える、当年十五歳の私窩子であった。秦淮に多い私窩子の中には、金花ほどの容貌の持ち主なら、何人でも

いるのに違いなかった。が、金花ほど気立ての優しい少女が、二人とこの土地にいるかどうか、それは少くとも疑問であった。彼女は朋輩の売笑婦と違って、嘘もつかなければ我儘も張らず、夜毎に愉快さうな微笑を浮べて、この陰鬱な部屋を訪れる、さまざま客と戯れてゐた。さうして彼等の払つて行く金が、稀に約束の額より多かつた時は、たつた一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしてゐた。

（全集第六巻）

右の引用文から、金花は職業が娼婦で、容貌が特別綺麗というわけではないが、「気立ての優しい」少女であることが分かる。芥川がここで強調しているのは金花の性格のことである。金花は性格が温順で、一家の家計を助けるために自分を犠牲にしていることも読み取れる。ここから見ると、彼女には近代的な自我、個性、強いて言うところのエゴイズムのかけらもない。金花が父親のために活きていることは、明らかである。そのような彼女の行動規範は、まさに儒教の女に対する掟の「三従四徳」（嫁ぐ前は父に従い、嫁いたら夫に従い、夫がいなくなると子供に従う）の反映である。

大正時代の日本は、西欧文明の流入により、女性も「個性」や「自我」を強調するようになった時代である。しかし、「個性」や「自我」が度を越えると、エゴイズムになる。「南京の基督」より三ヶ月前に発表された「秋」に描かれた信子と照子という姉妹は、まさにこのような近代的な女性である。日本の近代的な女性に失望した芥川が、中国女性に伝統的な要素を求めたと考えることは容易である。ただ、伝統的な金花を作り出したのは、当時の芥川に女性問題があ

ることも、看過できない。大正八年六月に、芥川が「愁人」と呼ばれる女性の秀しげ子と知る。しかし、後に芥川は秀しげ子の「動物本能」（或阿呆の一生）を憎く思い、大正十年の中国旅行を機会とし、やっと彼女から逃れることができたのである。後年、芥川は自伝的な作品の「或阿呆の一生」¹⁷に、「前の人力車に乗つてゐるのは或狂人の娘だつた。のみならず彼女の妹は嫉妬の為に自殺してゐた。「もうどうにも仕かたはない。」彼はもうこの狂人の娘に、一動物的本能ばかり強い彼女にある憎悪を感じてゐる。」（二十一）と書き、後悔の念を示す。このような事情があつて、芥川は日本の近代的な女性に飽き、金花を伝統的な女性に創り上げたと推測できる。

読書経験からの影響と芥川の実情という原因のほか、直接の原因として、谷崎潤一郎の「秦淮の一夜」¹⁸からヒントを得たと、芥川は自ら述べている。芥川が「南京の基督」の付記に、「谷崎潤一郎作「秦淮の一夜」に負う所尠からず」と記している。谷崎潤一郎は、大正七年の末、中国を旅行し、翌年「秦淮の夜」「蘇州紀行」「南京希望街」などの作品を発表する。芥川が参考にしてゐる「秦淮の夜」には、金花に近い女性が次のように描かれる。

ガランとした洞穴のやうな部屋の一隅に、十六七になる一人の娘が、荒寺の本堂に安置された木彫の佛像のやうになつて、寒そうに顔をわななかせながら、怪しい異国の紳士の闖入を訝えるが如く目を光らせて居たのである。その目は支那式に圓く飛び出て居ないけれども、且華やかではないけれども、底の知れぬ哀愁に充ちた潤ひを帯びて、横に長く切れて居た。（中略）年は十七で、名前を花月楼と呼んで、（中略）挟んで見ると掌

の中にすつぱり隠れてしまふほどな小さな愛らしい顔であつた。力を籠めてぎゅつと壓したらば、壊れてしまひそうな柔らかな骨組であつた。大人のやうに整つた、赤児のやうに生々しい目鼻立ちであると私は思つた。

『谷崎潤一郎全集』第六巻 中央公論社 昭和五十六年十月

右の文に出てゐる「花月楼」は、芥川に当時の中国人女性のイメージを与えたに違いない。洞穴のやうな部屋の一隅に、「底の知れぬ哀愁に充ちた潤ひを帯び」る目をする可憐な十六七の娘は、過酷な運命に従いながら「怪しい異国の紳士の闖入を訝えるが如く」見る。このような谷崎の中国人女性についての描写は、なんとなく中国の伝統的な女性のイメージを感じさせる。大正七年の時点、中国がすでに近代に入つていながらも、古典的な要素がまだ多く残されていた年である。中国では、女性運動が一九一九（大正八）年以後に盛んになつたため、それ以前の中国女性は殆ど古典的な雰囲気である。谷崎の「秦淮の夜」や「蘇州紀行」は、作品全体に古色蒼然とした中国が描かれてゐるため、花月楼のやうな伝統的な雰囲気を持ち合わせた女性が登場してくることも、ごく自然であろう。

先述した通り、伝統的イコール儒教的である。儒教は、漢代から近代まで、ずっと中国社会を秩序付けるプリンシプルであつた。儒教の三綱（君臣、父子、夫婦）の中で、女性を夫に従わせるという原則を作りながらも、「三従四徳」などの掟を決め、女性を「従順」的に育ててきた。これは当時の中国において、知識人をはじめ、大多数の国民の持つ女性についての倫理構造である。たまに背德的な女性への賛美が、中国古典文学に見られるものの、それはあくまで

も個別な現象であるに過ぎない。

谷崎の描いた花月楼の「底の知れぬ哀愁に充ちた」目からも、運命に対する彼女の無反抗な態度が読み取れる。彼女に近い女性像は、たとえ近代の中国文学においても、決して珍しい存在ではない。例えば、魯迅の「祝福」(一九二四)におけるヒロインの祥林嫂の描写を見ると、「伏し目がちにひとことも口をきかぬ」のような従順的なイメージで描かれている。善良、従順かつ無反抗的な態度は、儒教倫理構造の下の伝統的な女性にある特色である。この点において、金花の場合もそう言うのではないかと思われる。

以上のほかに、金花に基督教徒という特徴も見られる。基督教を信じる点はすぐに金花の近代性が連想されるが、しかし、金花にとつての基督教は罪意識があるから信じたものではなく、基督教による近代の「個」に目覚めたから信じたものでもない、ただ単純に「基督」に救われたいだけで信じたのである。関係部分を以下のように引用する。

少女の眼はこの耶蘇を見る毎に、長い睫毛の後ろの寂しい色が、一瞬間どこかへ見えなくなつて、その代りに無邪気な希望の光が、生き生きとよみ返つてゐるらしかつた。

(中略)

「しかしだね、——しかしこんな稼業をしていたのでは、天国に行かれないと思やしないか。」

「いいえ」

金花はちよいと十字架を眺めながら、考え深そうな眼つきになつた。

「天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。——それでなければ基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」

引用文から分かることだが、金花は基督を「姚家巷の警察署の御役人」と比較している。警察はこんな「稼業」をしている自分の心もちが分からないが、基督ならきつと分かってくれると信じている。こんな「稼業」をしている自分が分かってくれるから、金花は基督を「無邪気」に信じているのである。引用文の「無邪気な希望の光」という表現はそのような金花の単純さを物語っている。「基督」を無邪気に信じているからこそ、金花との一晩の代金を払わないために逃げた「無頼な混血児」を「基督」だと信じ込むことができたのである。「基督」を心から信じている点において、彼女の単純さがクローズアップされている。なお、金花の基督教徒という設定について、李秀卿は「芥川龍之介が書いた中国人女性」¹⁹⁾という論文の中で「作品をよく読むと、金花の基督性は無理な設定であることに気づく。金花の高尚な行為は基督による感化であるというより、数千年の中国の伝統文化によるものだといったほうがいいと思われる」(筆者訳)と指摘している。

以上のように、「南京の基督」において、金花は儒教倫理の下にある単純な少女として作り上げられたのである。金花の人物像から当時の芥川の抱いた中国人女性像は伝統的であることが分かる。

三

芥川は、中国人女性にこのようなイメージを抱き、大正十年三月下旬から中国に渡ったのである。旅行中に出会った中国女性は、旅行後の紀行文に書かれている。順番に拾ってみると、最初の到着地の上海で、芸者に会う場面が次に挙げられる。

これは色の白い、小造りな、御嬢様じみた美人である。宝尽くしの模様を織つた、薄紫の緞子の衣裳に、水晶の耳環を下げてゐるのも、一層この妓の品の好さを助けてゐるのに違ひない。早速名前を尋ねて見たら、花宝玉と云ふ返事があつた。(中略)すると其処の電燈の下には、あの優しい花宝玉が、でつぷり肥つた阿姨と一しよに、晚餐の食卓を囲んでゐた。食卓には皿が二枚しかない。その又一つは菜ばかりである。花宝玉はそれでも熱心に、茶碗と箸とを使つてゐるらしい。私は思はず微笑した。小有天に来てゐる花宝玉は、成程南国の美人かも知れない。しかしこの花宝玉は、一菜根を噛んでゐる花宝玉は、蕩児の玩弄に任すべき美人以上の何物かである。私はこの時支那の女に、初めて女らしい親しみを感じた。

〔上海遊記〕「十七 南国の美人(下)」

ここで、芥川が何故花宝玉に親しみを感じたかという点、彼女は菜根を噛んでいるからである。芥川は、貧しくてもめげない、菜根を噛んでいる花宝玉に、宝尽くしの模様の衣裳と水晶の耳環をして

いる時と違う人間らしさを感じたからに違いない。菜根を齧る花宝玉は、まさに西瓜の種を食べる金花のような女性だと感動し、親しみを感じたと考えられる。

それから、蘇州で、芥川は「青麦の畠の間に、紅い花をつけた玫瑰の棚、一さう云ふ風景の処処に、白壁の農家が何軒も見える。殊に風流に思つたのは、そんな農家を通り過ぎる毎に、窓の中を覗きこむと、上さんだか娘だか、刺繍の針を動かしてゐる、若い女も少なくない。」²⁰という。昔の女性がよくやる「刺繍」に芥川が風流を感じたのである。しかし、この中国旅行で、そのような女性ばかりに会つたわけではない。同時代の中国は、もはや近代に入りつつある中国であり、五・四運動や新文化運動の影響により、中国女性たちも近代的な人間になろうとしていたのである。ここで、まず、近代的な女性を作り出す時代環境を見ておきたい。

一八四〇年のアヘン戦争以来、中国は絶えず西欧列強と戦つて来たが、殆ど敗北に終わつてしまつたのである。芥川が中国を旅行する大正十年も、中国の各階層が中国を救う為に努力し続ける最中であつた。辛亥革命(一九一一年)から、五四運動(一九一九年)や中国共産党の成立(一九二一年)などの様々な救国運動が行われ、有識者たちがそれぞれ違う形で中国を変えようとしていたのである。その中で、陳獨秀の「新文化運動」は、思想の面から当時の中国人に多大な影響を与えていた。政府の「中体西用」(精神的なもの是中国伝統的なものを用いる、物質や技術的なものは西洋のものをを用いる)という政策に対し、陳獨秀をはじめ、魯迅、李大釗などの文人たちは、精神的にも物質的にも「全面西洋化」を提唱すべきだと主張する。そして雑誌や新聞を使って、猛烈に西洋化を宣伝し

たのである。政府と民間の努力によって、西洋化は、たちまち当時の中国で大流行するようになったのである。

このような時代の雰囲気を感じ取った芥川は、「今度初めて支那へ渡りましたが、来て見るとモット早やく来れば好かつたと思ひました。支那は早く来ないと時と共に段々古いものが破壊されて行きます²¹⁾」と言ひ、中国の近代的な変化に嘆いたのである。まさに芥川の言う通り、当時の中国では、古いものがどんどん破壊され、何から何まで西洋風にしようとしていたのである。蘇州で見物した芥川は、蘇州七塔を「桃色と金―かう云ふ色の配合は、妙に肉感的な所があるだけ、如何にも現代の南国らしい。」と述べ、建築にさえ近代化を感じたらしい。

実は、当時の中国では、破壊されたのは物だけではなく、伝統的なイデオロギーも破壊される寸前であった。「新文化運動」の儒教批判や、五・四運動の反封建主義などの影響を受け、人々の精神が、伝統的な儒教から西洋のいわゆる「自由」「平等」「民権」などに転換しようとしていたのである。勿論、自由、平等などの西洋思想の真意は、当時の人々（知識人の一部分以外）にとつて、内実が何であるか分かつていなかった。それにもかかわらず、彼等は、まず儒教的な過去を否定しようとしていたのである。まるで過去を否定すれば、近代人になれるかのようなのである。以上の運動の影響によって、女性解放運動も盛んに行われたのである。女性たちは、反帝国主義・反封建主義の五・四運動に参加することによって、自ら目覚めたのである。「新文化運動」の機関誌「新青年」は、家族制度、儒教制度の下で最大の抑圧を受ける女性を解放しようとし、女性の自立を様々な面から論じていたのである。このような運動は、知識人女性

以外、普通の女性にも多少の感化を与えたに違いない。

「湖南の扇」の作品舞台である湖南では、毛沢東が、湖南学生聯合会の機関紙「湘江評論²²⁾」に、三回にわたつて「民衆の大連合²³⁾」を書き、小さな連合から大きな連合を作り上げようと呼びかけたのである。女性の連合を呼びかける箇所では、女性もわれわれと同じ人間であるのに、どうして政治への参加や交際を許さないのかと抗議し、女性が置かれている社会的な位置について論じていたのである。

そんな中、一九一九年十一月十四日に、湖南の長沙で、花嫁が嫁入りかこの中で自殺する事件が起こつた。趙五貞という女学生が、嫁入りの日にカミソリで頸を切つて自殺し、両親の取り決めた結婚に反対したためである。この事件は湖南で重大な反響を巻き起こした。毛沢東は「大公報」に九篇ばかりの花嫁自殺事件に関する評論を発表し、そのほかの人々もそれについて論じ、封建的婚姻制度などの封建的体制・思想打破の思想を一般民衆に訴えている。このような影響の下で、長沙の女性解放運動は大きな進展を遂げた。

ジャーナリストとして中国を視察するため、中国滞在中の芥川は、風物より中国人の方を興味深く観察した。「江南遊記」の「九西湖（四）」に、芥川が「断桥、孤山、雷峰塔、―それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである。」と述べる。当時の女子学生の服装の「白の着物へ黒のスカートをはいた²⁴⁾」という格好まで、注意深く観察した芥川は、中国女性の近代化に気づかない訳がない。しかし、彼は決して、近代的な女性に好感を示さなかつた。上海で、芥川が「彼等（娼婦たち 引用者注）はどう云ふ料簡か、大抵眼鏡をかけてゐます。事によると今の支那で

は、女が眼鏡をかける事は、新流行の一つかも知れませぬ。」と、嘲笑めいた言い方をする。また、蘇州の女を「漆のやうに髪が光つた、若い女が二三人、鶻色や薄紫の着物の尻をわざと振るやうに歩いてゐても、何処か鄙びた寂しさがある。」（「江南遊記」十四 蘇州城内（中））と述べ、決してハイカラな女性を認めようとしなない。北京で近代的な女性を見ると、「新月北京の天に懸り、ごみごみしたる往來に背広の紳士と腕を組みたる新時代の女子の通るのを見る。ああ言ふ連中も必要さへあれば、忽ち斧は揮はざるにもせよ、斧よりも鋭利なる一笑を用ゐ、御亭主の脳味噌をとらんとするなるべし。」と想像し、「新時代の女子」を残酷な人間として認識していることが分かる。また、帰国する直前、天津で、今回の中国旅行を振り返る芥川の感想にも、「支那の学生でも断髪してゐる婦人でも非常に新らしがつてゐるけれども實際は一種のカブレであるから頗る危険であると思ひます。」²⁶ という批判も見られた。

四

次に、大正十年の中国旅行の見聞を材料にして、大正十五年一月に発表された「湖南の扇」²⁷を見ていきたい。主人公の玉蘭は、芥川の中国旅行後に書いた唯一の中国人女性である。大正十五年という時点で、すでに死を間近に控えた芥川は、旅行中に出会った中国女性を思い出しながら、玉蘭を創り上げたに違いない。まず先行研究における玉蘭の位置づけを確認しておきたい。

吉田精一は「小説としてよりも、旅行記の一節といったやうな淡々とした味があり、苦心のわりに報いられない」と評する。²⁸ 紅野敏郎

は「わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味はひます」ということばを聞いたとき、「僕は体の震へるのを感じた」とは書いている。この作品のヤマバはこの前後の一瞬にあることはいうまでもない。一人のこの美しい女性の、したたかな氣質に大きな意味を発見した故に、一編の物語をつくりあげたのであろう。」と述べ、「あまりにも芸術的な話にしたてあげすぎている」と指摘している。関口安義は「語り手は湖南の民、さらに言うならば中国人の情熱的行為に目をみはつているのである。人血のしみこんだバスケット（人血饅頭）を食べるといふのは、無病息災になるといふ迷信を超え、ここでは殺された愛人へのレクイエム、玉蘭という女の情熱を語つているのである。」と積極的な評価を下す。また、劉建輝は「女主人公に代表される湖南の「負けぬ気の強い」土地柄が、どこかで上海などで目にしていたあの半植民地的な「だらしない」混沌と比較されている」と認識している。²⁹

以上の先行研究から、玉蘭を「したたかな氣質」「情熱的」「負けぬ気の強い」という女性としてとらえていることが分かる。実は、芥川自身も「湖南の扇」の冒頭に「僕は湖南へ旅行した時、偶然ちよつと小説じみた下の小事件に遭遇した。この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことになるのかも知れない。」と書き、「情熱に富んだ」湖南人を書きたいと意図を示す。ここでの「僕」は、言うまでもなく芥川の分身である。芥川が湖南省の首府長沙を訪れた日は、大正十年五月二十九日から六月一日までの三泊四日である。彼の書簡にある、「長沙に來り葉德輝の蔵書を見た」³⁰、「長沙は湘江に望んだ町だが、その所謂清湘なるものも一面の濁り水だ 暑さ八十度を越へてゐる バンドの柳の外には町中

殆樹木を見ぬ 此処の名物は新思想とチブス³³」などの記述からも、湖南に來た事実が分かる。

ヒロインの玉蘭が愛人の血に染込ませたビスケットを食べたのを目撃した「僕」は、玉蘭が負けず嫌いで情熱的な女に見え、小説を仕上げたという。では、次に本文から玉蘭の人物造型を確認してみよう。「僕」が最初に玉蘭を見た場面は次のようである。

顎の四角い彼女の顔は唯目の大きいと言ふ以外に格別美しいとは思はれなかつた。が、彼女の前髪や薄い黄色の夏衣裳の川風に波を打つてゐるのは遠目にも綺麗に違ひなかつた。

(全集第十三卷)

引用文から分かることであるが、玉蘭は「格別美しい」女性ではないようで、「僕」もあまり関心を示さなかつた。そして、次に「僕」が玉蘭を見たのは妓館の中である。

彼女は外光に眺めるよりも幾分かは美しいのに違ひなかつた。少なくとも彼女の笑ふ度にエナメルやうに齒の光るのは見事だつたのに違ひなかつた。しかし僕はその齒並みにおのづから栗鼠を思ひ出した。栗鼠は今でも不相変、赤い更紗の布を下げた硝子窓に近い鳥籠の中に二匹とも滑らかに上下してゐた。

(傍線部 引用者)

右の文から分かるように、最初遠くから玉蘭を見たとき、あまり感心しなかつた様子である。次に、妓館の中で玉蘭を見たとき、「お

のづから栗鼠を」思い出したという。実は「湖南の扇」を読むと、「栗鼠」という言葉が、重要な小道具であることにすぐ気づく。この小道具によつて、ヒロインの性格が暗示されている。

妓館に入つて來るとき、「僕」の目に、「この部屋の天井の隅には針金細工の鳥籠が一つ、硝子窓の側にぶら下げてあつた。その又籠の中には栗鼠が二匹、全然何の音も立てずに止まり木を上つたり下つたりしてゐた。」という光景が目映る。それから、最初に栗鼠を見たせいも、又妓館の彼女たちを栗鼠として想像したのか、芥川は、右の場面以後も、栗鼠を何回も登場させる。妓館で会つた彼女の林大嬌を、「テニスか水泳かの選手らしい体格も具へてゐた。僕はこう言う彼女の姿に美醜や好悪を感じるよりも妙に痛切な矛盾を感じた。彼女は實際この部屋の空気と、一殊に鳥籠の中の栗鼠とは吊り合はない存在に違ひなかつた」と言い、体格の良い彼女が「殊に鳥籠の中の栗鼠とは吊り合はない」と強調する。ここで、体格のいい林大嬌より、玉蘭のほうがはるかに「栗鼠」に似合う存在であることが確認できる。「細い金縁の眼鏡をかけた」「夏衣裳にダイヤモンドをいくつも輝かせていた」という林大嬌の外見から見ても、その後の彼女の行動から見ても、林大嬌は「栗鼠」に似合わない強い存在であるに違ひない。林大嬌は、お母さんを出迎えると言つて、實際に彼氏を出迎えた含芳に、「突然林大嬌は持つてゐた巻煙草に含芳を指さし、嘲るやうに何か言ひ放つた」という強い態度を示す。そのような林大嬌と比べると、玉蘭はかよわく、従順で、鳥籠に鎖される栗鼠のような存在であろう。このように、「栗鼠」という小道具を使つて二人を対比させ、人物像を一層鮮明に押し出すことが、芥川の狙いであろう。

しかし、強気的林大嬌に、黄老爺の血がしみこんだビスケットを勧める場面を見ると、「林大嬌はちよつと顔をしかめ、斜めに彼の手を押し戻した」という、まさに「栗鼠」に似合う行動を取る。普通に考えると、林大嬌の行動はおかしくない。死人の血がしみこんだビスケットを食べることができる女性は、いくら「無病息災」と言われても、食べない筈である。しかし、その時、「僕」は、「栗鼠」のような玉蘭が、血のしみこんだビスケットを食べ、「わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味はひます。あなたがたもどうかわたしのやうに、……あなたがたの愛する人を……」という強気な言葉を吐いたのを目撃して驚いた。これはまさに鳥籠の中に鎖される「栗鼠」に似合わない行動である。

このような、はるかに「僕」の想像を超えた玉蘭を見て、「僕」の受けた衝撃は大きいはずである。それは、玉蘭は、明らかに伝統的な金花と違う性格を持つ女性だからである。父親のために生きる、まだ近代的な自我が目覚めていない金花と異なり、玉蘭の言動からは、金花のような従順や無反抗なイメージが感じられない反面、情熱的で且つ反抗的なイメージを強く感じ取れる。玉蘭のような女性を描くことは「湖南の扇」の創作意図であると考えられる。

大正十年の中国旅行中、長沙に滞在した芥川は、長沙の女子師範学校に附属する高等小学校を参観した。このことが「雑信一束」³⁴の「学校」に書かれてある。その中に「女学生は皆排日の為鉛筆や何かを使はないから、机の上に筆硯を具へ、幾何や代数をやつてゐる始末だ。次手に寄宿舎も一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰ふと、教師愈仏頂面をして曰、「それはお断り申します。先達もこここの寄宿舎へは兵卒が五六人闖入し、強姦事件を惹き起した後で

すから！」という箇所がある。江口渙は『わが文学半生記』³⁵において、芥川が自分に述べた長沙師範学校参観について、次のように回想する。

女学生たちは日本が帝国主義的侵略をやめるまでは断じてこの運動はやめないといっている。その決意と闘志のはげしさを実際に見たとき、芥川はもう少しで涙が出そうになるほどの感動に打たれた、といっていた。「中国人という民族は全くたいした民族だね。いまに見たまえ。いまに、君。中国はたいした国になるよ。」

この話のあとで芥川は感慨ぶかい表情とともにこうつけ加えた。女子学生の激しい排日運動に感動を覚えた芥川は、湖南人の「決意と闘志のはげしさ」に心が動かされて「湖南の扇」を作り上げたという見方も提示できよう。これは「湖南の扇」の冒頭に書かれている「広東に生れた孫逸仙等を除けば、目ぼしい支那の革命家は、——黄興、蔡鍔、宋教仁等はいづれも湖南に生れてゐる。これは勿論曾國藩や張之洞の感化にもよつたのであらう。しかしその感化を説明する為にはやはり湖南の民自身の負けぬ気の強いことも考へなければならぬ。」という記述からも推測できる。革命家は言うまでもないが、まだ幼い女子学生もこのような負けぬ気の強い気質を持っていることに、芥川は深く心が打たれていると考える。負けぬ気の強い湖南人を書くために、芥川は、芸者の玉蘭をその代表として選んだ。何故芸者を選んだかという点、芥川は中国滞在中、何回か芸者と同席した経験があつたため、リアルに書けるからだと推測でき

る。

芥川が、西洋と日本帝国に侵略されていた当時の中国で生きている負けず嫌い、反抗的な性格を持つ中国人女性を描いたことは、彼の旅行中の中国人女性、ひいては、当時の中国人に対するイメージの現われであると言える。それと同時に、芥川は「湖南の扇」を「將軍」や「桃太郎」⁽³⁸⁾といった作品の続きとして、彼自身の帝国主義侵略者への抗議を示したとも言えよう。

五

読書から得た「南京の基督」における伝統的な金花と、中国旅行後に書いた「湖南の扇」に反映された、負けぬ気の強い玉蘭との比較を見ると、大正十年の中国旅行による芥川の中国人女性観の変化が窺われる。また、同時代の中国の妓女を描いたにもかかわらず、谷崎と芥川とは、読者に提示する中国女性のイメージが全く異なる。この旅行なしでは、玉蘭のような中国人女性像は、決して生まれて来ないのであろう。愛人の血が染み込んだビスケットを食べる玉蘭がまだ近代的な女性であると言えないかもしれないが、しかし、作者の芥川は、玉蘭の人物像に排日運動に参加している女子生徒を重ねたに違いない。強いて言うると、芥川は激動の時代を生きる負けぬ気の強い中国人女性に、近代中国の鼓動を感じたのであろう。

- (1) 「芥川龍之介『支那遊記』の世界」『国語と国文学』一九九一年九月
- (2) 「改造」一九二九年八月
- (3) 「南京の基督」論「文芸と思想」福岡女子大学 一九七六年二月

- (4) 「解説」芥川龍之介『南京の基督』角川文庫 一九五六（昭和三十一）年九月
- (5) 「作品解説」『杜子春・南京の基督』角川文庫 一九六八年一月二〇日
- (6) 「海底に潜むもの」「南京の基督」前後「国語と国文学」一九七一年一月
- (7) 「芥川龍之介のキリスト教思想」「解釈と鑑賞」一九五八年八月
- (8) 「中央公論」第四十年第一号 一九二五（大正十四）年一月一日 全集第十二巻
- (9) 「支那趣味」という言葉が最初に現れたのは一九二二（大正十一）年一月号の「中央公論」であった。一月号の「中央公論」に、「支那趣味の研究」というコーナーがあり、五篇の文章が並んだ。小杉未醒「唐土雜観」、佐藤功一「私の支那趣味観」、伊藤忠太「住宅から見た支那」、後藤朝太郎「支那文人と文房具」、谷崎潤一郎「支那趣味と云ふこと」という順番である。それ以来、「支那趣味」という言葉はまたたく間に広がっていったのである。
- (10) 日本近代文学館所蔵芥川蔵書目録による。
- (11) 石川忠久編 汲古書院 一九八二（昭和五十七）年三月
- (12) 芥川の蔵書にある。李昉など撰 談愷校刊 唐詩同校 黄晟校刊 道光二十六年鐫
- (13) 芥川の蔵書にある。瞿佑著 洪武十一序
- (14) 芥川の蔵書にある。散鶴山人原稿 光緒二十三年石印
- (15) 芥川の蔵書にある。王理堂著 民国十年
- (16) 「中央公論」一九二〇（大正九）年四月 全集第六巻
- (17) 「改造」一九二七（昭和二）年十月 遺稿 全十第十六巻
- (18) 「秦淮の夜」の初出は大正八年の「中外」である。
- (19) 「西南民族大学学報・人文社科版」第十一期 二〇〇五年九月 原文は「仔細阅读作品后·我们感到这件强加在少女身上的宗教外衣是多么勉强·与其说宋金花的这种高尚行为是基督耶稣感召的结果·倒不如说这是数千年的中华传统文化濡染的结晶」である。
- (20) 「江南遊記」十六 天平と靈巖と(上) 全集第八巻
- (21) 「新芸術家の眼に映じた支那の印象」「日華公論」第八巻第八号 一九二一（大正十）年
- (22) 一九一九年七月発刊
- (23) 「湘江評論」二一四期、一九一九年七月二十一日、二十八日、八月四日
- (24) 「江南遊記」十一、西湖(六)
- (25) 「上海遊記」十四、罪惡

- (26) 同注^⑧
- (27) 『湖南の扇』は初刊本『湖南の扇』、全集第十三巻に収められている。草稿が『芥川龍之介資料集』（山梨県立文学館 一九九三年一月三日）に収められている。
- (28) 『芥川龍之介』三省堂 一九四二年十二月
- (29) 『近代日本文学誌』本・人・出版社』紅野敏郎 早稲田大学出版部 一九八八年十月
- (30) 『特派員 芥川龍之介―中国で何を視たのか―』毎日新聞社 一九九七年二月
- (31) 『魔都上海』劉建輝 講談社 二〇〇〇年六月
- (32) 一九二二（大正十）年五月三十一日 石田幹之助宛
- (33) 一九二二（大正十）年五月三十一日 滝井孝作宛 ちなみに、この書簡にある「八十度」は摂氏二六・七度に当たる。
- (34) 初出未詳 初刊本『支那遊記』改造社 一九二五年十一月 全集十二巻
- (35) 『わが文学半生記』江口渙著 日本図書センター 一九八九年十月
- (36) 『支那遊記』（改造社 一九二五年十一月）にその記述が見られる。
- (37) 一九二二（大正十）年一月一日発行の「改造」第四巻第一号に掲載され、のち『將軍』『沙羅の花』『芥川龍之介集』に収められた。
- (38) 一九二四（大正十）年七月一日発行の「サンデー毎日」第三年第二八号に掲載された。

本文中の芥川作品の引用はすべて『芥川龍之介全集』（二十四巻）岩波書店によるものである。

王 書瑋 北京科技大学外国语学院